吾妻渓谷

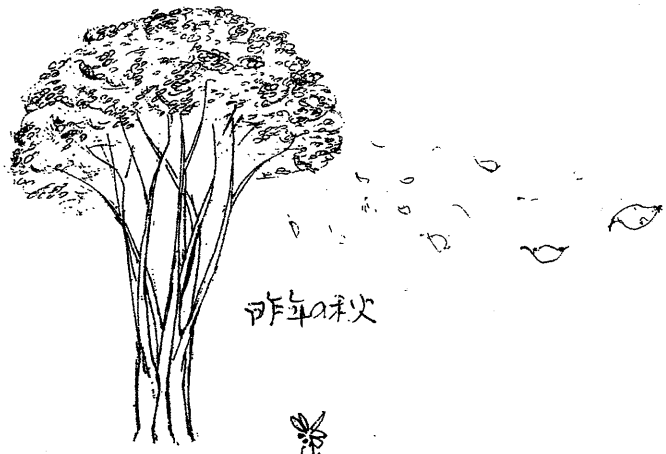
ハッ場ダム

2006. 11 No.17

ライブ&トーク 加藤登紀子となかま達が唄う

◀特集▶ ハッ場いのちの輝き

利根川流域脱ダム宣言



— 目次 —

1. ハッ場ダムの黒い糸を断つために
2. ライブ&トーク ハッ場いのちの輝き
・ハッ場あしたの会”設立趣意書
・会場からの感想など
3. 東京の水あまり
4. 事務局ニュース — 新しくできました
・環境マンガ『5分でわかるハッ場ダム』
・ハッ場運動支援Tシャツ

ハッ場ダムを考える会
首都圏のダム問題を考える市民と議員の会

八ッ場ダムの黒い糸を断つために

渡辺洋子（「八ッ場といのちの共生を考える」実行委員長）
（八ッ場ダムを考える会事務局長）

１９７７年の新聞記事に、こんな一節がありました。
「八ッ場ダム。それは、もつれた糸を次々に繰り出す、黒い糸車のように見える。」
（朝日新聞群馬版）

この時、すでにダム計画発表から２５年が経過していましたが、それから３０年近くたった今も、八ッ場ダムは黒い糸を吐き続けています。

首都圏のダム反対運動に対して、長年の闘争のはてにダムを受け入れた水没予定地の住民は、「今頃になって反対しても、もう遅い」と反発してきました。今も昔も起業者である国は、ダム事業の全体像を流域住民に明らかにしようとしません。ダム計画発表と同時に、水没予定地では生活破壊が始まりましたが、下流では地元がダムを受け入れ、実際に事業がスタートして初めて、税負担、環境破壊などの被害が実感されるようになりました。破壊された生活を再建したいという地元民の切実な願いは、黒い糸車にかかると「ダム事業の推進」にすり替わり、「公共事業のコスト縮減」のターゲットとされてしまいます。これではいつまでたっても、下流と地元の利害が対立する構図は変わりません。

“八ッ場”という言葉は、今は群馬県長野原町の一部となっている旧川原畑村の字の名です。吾妻渓谷に近い川原畑は、対岸の川原湯と共に全水没地とされています。昨年、川原畑から転出した方に、八ッ場の名のついた沢を案内してもらいました。かつて澄んだ水が豊かに流れ、岩魚、山女が棲んだ八ッ場沢は、巨大な砂防ダムによって流れを幾重にも遮られていました。

八ッ場ダムとは何なのか？　ダムとセットで語られる八ッ場に、人々の生活があり、命があることに、今まで首都圏下流の私たちはどれだけ目を向けてきたのか、あらためて考えさせられました。脱ダム運動には様々なアプローチがありますが、ダム計画が現地で破壊してきたもの、破壊しようとしているものが、何よりも雄弁に問題の本質を語っているように思えました。

昨春、加藤登紀子さんに手紙を出したところ、思いがけず夏休みに現地を訪ねて下さいました。多くの環境問題に関わってきた登紀子さんにも、八ッ場は大きな衝撃を与えたようです。これをきっかけに、さる１０月９日、東京で八ッ場をテーマとした初のイベント“ライブ＆トーク 加藤登紀子と仲間たちが唄う 八ッ場いのちの輝き”が開催されました。

１３００席ほぼ満杯の会場を裏で支えたボランティアは７０名を越え、その中には鴨川自然王国、八ッ場の各市民団体の呼びかけに応えた２０名以上の学生たちの姿もありました。

八ッ場の今を紹介するビデオで幕を開けた第一部は、登紀子さんと永六輔さん、専門家の大熊孝さん、嶋津暉之さん、司波寛さんをまじえたシンポジウムでした。イベント呼びかけ人の澤地久枝さんがこの国のありようを語り、野田知佑さんが国交省の河川政策を告発し、池田理代子さんが「ふるさと」を独唱。南こうせつさんも加わったライブでは、「神田川」「そこには風が吹いていた」「Power to the people」と、曲を追うごとに会場は熱気に包まれ、フィナーレでは全員が手を取り合って「故郷の空」の大合唱となりました。

イベントのシンボルとなった岩魚の図案は、水没予定地にある川原湯温泉の食堂の少年が描いた木彫画です。登紀子さんが川原湯を訪ねた昨夏、周辺の沢で魚釣りをするという小学６年生の少年は、近所の大工さんから貰った硬い集成材に、岩魚が川面から跳び上がって蝶を捕まえる瞬間を刻みつけていました。

岩魚の少年はこの春、中学生になりました。４年前、少年の通った小学校は、群馬県で一番古い木造校舎を解体して代替地に引越しましたが、今度は入学したばかりの中学校の解体作業が始まりました。廊下を雑巾がけするとき、木のにおいがするのが好きだった、という子どもたちは、「僕たちの小学校を返して！」と親たちに訴えたといいます。

人間関係が希薄といわれる時代ですが、山村の人々と都市の住民が共生するためには、人と人とがつながり合い、叡智を結集するしかありません。どんな時代にあっても、未来に向かって生きる子供たちがいる限り、いつも希望は私たちと共にあります。

ステージで加藤登紀子さんが、「みんなで一緒に温泉に行きましょう」とアピールした川原湯のお湯は、今日も地の底からこんこんと湧き出ています。温泉街のカツラの木が、黄色い小判のように色づいてきました。

故郷の空　　スコットランド民謡

夕空晴れて　秋風吹き
月かげ落ちて　鈴虫泣く
おもえば遠し　故郷の空
あゝわが父母　いかにおわす

澄みゆく水に　秋萩たれ
玉なす露は　すすきに満つ
思えば似たり　故郷の野辺
あゝわがはらから　たれと遊ぶ

（明治二十一年5月明治唱歌1より）

＊ライブフィナーレで大合唱となりました。

“八ッ場あしたの会”設立趣意書

本日は「加藤登紀子となかま達が唄う八ツ場いのちの輝き」にご来場いただきありがとうございます。

加藤登紀子と私たちにとって、本イベントは「八ツ場問題」を広く社会化するための第一歩です。単に「八ツ場ダムを中止させればこと足れり」とは思っておりません。ダムをストップさせても、半世紀にわたる筆舌につくしがたい苦節のなかで疲弊の極にいたった現地の再生がなされなければ意味はありません。また、仮に建設工事が進められても、粘り強く地域の再生と現地の人々の暮らしの再建を、地元の人々と共に模索していきたい、そう考えています。

「釣り上げられてしまった魚だ」と諦めるのではなく、網を破って自由な生をまっとうする未来を夢見て、そのための知恵と方策をフル動員しよう、そんなしたたかでしなやかで粘りのある未来志向の運動を願っています。

それは、巨大開発によって破壊された「持続可能な暮らし」と「自然環境」をどうすれば取り戻せるか、そのための多様な知恵をあつめるプロジェクトでもあります。すでに、本イベントと並行しながら、持続可能な地域と環境を再生させるための法律や制度の素案づくりに取り組み、その成果の一端を本イベントの第一部で発表いたします。

やがては吉野川可動堰、諫早湾干拓、川辺川ダム、中海宍道湖埋め立てなど、戦後の大型公共事業に対する運動ともつながって、日本各地で失われた自然環境と持続可能な暮らしを取り戻す大きなうねりとなることを願っています。

そんな夢に向けたささやかな第一歩として、「八ツ場あしたの会」を立ち上げようと思います。当面目指すのは、

①「八ッ場」の現状と課題を一人でも多くの人びとに知らしめる。

②「八ッ場」の地域再生プランを地元の人々と共に考える。

③そのなかから、公共事業や巨大開発によって破壊された全国各地の地域を再生させるための法律や制度をつくる国民運動を展望する。

そのために「知恵」と「汗」と「資金」のすべてか、少なくとも一つを提供する意思をお持ちの方のご参加をお待ちしています。

「ライブ＆トーク 八ッ場いのちの輝き」呼びかけ人代表 加藤登紀子
「八ッ場といのちの共生を考える」実行委員会（委員長・渡辺洋子）

＊ イベント会場で“八ッ場から地域の再生を考えるみんなの会”（仮称）設立趣意書を配布しました。イベント終了後、「会の名称は短く親しみがもてるものにしたい」という意見により、正式名称は登紀子さんの提案で“八ッ場あしたの会”に決定しました。“八ッ場あしたの会”の今後の活動は、会報でご報告する予定です。事務局はイベント実行委員会事務局と同じです。

◆加藤登紀子さんのコンサートを聴いて◆◆

中平 順子（イベント呼びかけ人・子ども文化研究家）

電車を乗り継ぎ、千駄ヶ谷の駅からタクシーをとばして青年館へ滑り込んだ。
第一部がちょうど終わるときだった。
朴訥な風情の永六輔さんがステージ中央に立っていて、会場はとても盛り上がっていた。
「永六輔さんは、グラビア写真とちっとも変わらないお顔なのね」と妙に納得する。

休憩を挟み、第二部が始まった。
登紀子さんが歌うと、切々たる悲哀が不思議なことに人生の喜びに転化する。
歌声が流れ、低音から高音と、その歌詞の一言の響きが胸にしみる。
オブリガードとギター・・・ピアノの音色がうつくしい。
歌が豊かにふくらむ絶妙のコンビだ。
人生を重ねて歌うとは、このことか・・・。
歌にのせて伝わる深い思いと、そして重なる私の人生…涙が溢れた。

友情出演の南こうせつさんの「神田川」は、私の新婚時代そのもの。
神田川に近い畳一間のアパートが私たちの出発だった。
風呂屋を出るときの合図は、彼の大きな咳払い。
南こうせつさんの優しい歌が、40年にならんとする以前の懐かしい光景を思い出させてくれた。
私ももう60歳を超した。
人生は本当にあっという間だが、生きとし生けるものすべては生を全うし、死を迎え、脈々と続く悠久の土となる。
吾妻渓谷も、悠久の時間が創造した「生物の歴史と生命の循環の美」なのだ。
いずれ、私たちも山になるのだろう。

♪夕空晴れて秋風吹き・・・♪
登紀子さんとみんなで合唱しながら、紅く染まる吾妻渓谷を思い出す。
加藤登紀子さん、ハッ場に心を寄せてくださってありがとう。
私たちでは絶対出来ない素敵な出会いを創ってくださってありがとう。
手を取り合う優しさと、そして何よりも声に出すこと。
よりよき選択へ行動する勇気と希望に向かう生命の燃焼をありがとう。

“八ッ場いのちの輝き”アンケート　《感想より》

♡ 久しぶりにイベントで涙が流れました。大変感動しました。
♠ 是非、近いうちに川原湯に行き、語りながら飲み明かしたいです。（東京）
◇ 群馬に住んでいても、あっちの方で何かやっている、という感じでした。当事者の方々は、出て行った人も、残った人も、自分の意志や努力とは関係なく傷ついてしまった。皆が懐かしい故郷や友人を思い出せるとよいと思います。（群馬）
♣ 自然の大切さが母体から生まれた子のように、心、体、頭で感じられた。（東京）

♡ 人生で最高のコンサート。ありがとうございました。（東京）
♠ 大きな公共事業を止めるには、大きな「力」が必要なこと。この力は世論であることを知らされました。地域再生の政策をしっかり立て、住民の方々と国、県、町へ要求をしていければと思います。（埼玉）
◇ 川原湯の方々と関東圏の人たちが歴史を共有し、地域再生を応援してコラボレートできる運動のスタートになればよいと思いました。（千葉）
♣ 川原湯の出身です。今になってダムが中止になったら、やむなく出て行った者は国交省を許せないだろうと思っていましたが、イベントに参加して涙が止まりませんでした。故郷を見捨ててはいけない、と感じました。（東京）

♡ 八ッ場ダムに対する気持ちの整理の機会になりました。（長野）
♠ 筑波でも集会を開かねばと思いました。ホームページ見せていただいています。（茨城）
◇ ダムのこと、地域のことを考えると、どうしようもない歯がゆさ、辛さと向き合うことになり、心が重くなりました。でも、まずは川原湯温泉につかりたいです。この運動が、これからの新しい形の国民運動として広がりをもつことを願っています。（千葉）
♣ 是非、川原湯温泉を訪ねたいと思います。選挙で選ぶ人をしっかりと見極めたいと思います。（埼玉）

♡ 八ッ場ダムのことは当初から知っています。あの渓谷美が壊れないのなら、今からでも間に合うのなら、ダム建設を中止させたい。（東京）
♠ ダムを止める以上、八ッ場の人々の生活再建、壊れかけた自然の再生をしっかりやってゆかなくてはいけないと感じた。（群馬）
◇ 現在の問題と可能性とを、確かな情報と共に知ることができた。（東京）
♣ ダムの是非よりも、住民の生活再建、その後について深く議論してほしかった。最後に司波さんが話していた「地域再生」にこそ力点を置くべきではないか。すべての責任を行政に押しつけてしまったのは残念。

♡ トキコさんのパワーはすごいですね。おいちゃん(南こうせつ)に会えてよかった（東京）
♠ はじめに見ました映像の川原湯温泉の鄙びた風景のすばらしさがダムに消えることは何としても反対し、この風景が後々まで続くことを望みたいです。（千葉）
◇ 会場の熱気、登紀子さんの力で何かが動く思いがあります。（群馬）
♣ 八ッ場ダムの問題点をやわらかく訴えてくれた。登紀子さんの素朴なギターの弾き語りがよかった。（千葉）

♡ １０月８日現地に行き、共同浴場“王湯”に入浴しました。湯温、泉質がとてもよかったです。食堂『旬』は安くておいしく、豊田乳業のヨーグルトはとても美味でした。山林が全体に荒れている感じがしました。（東京）
♠ 長野原町の地元の者です。別個にたつかもしれませんが、共に撃てればよいと思います。（群馬）
◇ 池田理代子さんの生の声、南さんの飛び入りなど、意志をもつ原動力をもらえたと思います。どう実際に動くか、自分に問い直す機会になりました。ありがとう！（東京）
♣ 数字による論理的な説明と現場の生々しい状況説明があり、非常によかった。（神奈川）

♡ 地元の人を応援したいという加藤さんの想いを一緒にできたと思います。自分でできることをと思い、群馬の親戚にチラシ、詩集を送りました。（東京）
♠ 川原湯温泉に行きます。いっぱい誘って行きます。（兵庫県）
◇ ディスカッション、スライドもよかった。すばらしかったです。ありがとう。（東京）
♣ ５０年間ダムがなくても生活できたのに、なぜ続けるのかわからない。（登紀子倶楽部）

♡ 知らなかったこと、知る必要があることを気づかせていただいた。「ダメなものはダメ！」と小さな声をたくさん集めて声を上げていくことが一番ですね。
♠ 温かい気持ちにさせていただいた。勇気を持って、よいと思うことをささやかでも続けてゆきたいと思わせていただいた。
◇ ダム計画のことがわかった。現地の人たちを応援したいと思いました。（埼玉）
♣ ヤンバと読むことすら知りませんでした。お世話になりました。Ｔシャツはダムストップの文字が入った方がよかった。これだけの出演者で３０００円は安かった。（群馬）

♡ 永六輔さんの話をくだくテクニックがすばらしかった。同時におトキさんの一生懸命さが伝わってきました。いつにもまして歌詞に聴き入っていました。（登紀子倶楽部）
♠ 八ッ場ダムのことは恥ずかしながら知らなかった。登紀子さんの活動に感動。（千葉）
◇ 一人ひとりがつながって、大きな輪ができることを信じたい。（東京）
♣ 同じ長野原町の中の問題であるにも関わらず、町民の連帯がつくれません。本当に悲惨なダム問題をこんな形で支えることもできるのかと思いました。（群馬）

～☆ 会場へのメッセージ ☆～

高木久仁子さん（イベント呼びかけ人）より

今回のイベントには残念ながら参加できませんが、この催しを機に、八ッ場ダムストップの声がますます大きく広がるよう願っています。

高木仁三郎は2000年10月8日に亡くなり早や6年が経ちます。
彼は、

「群馬の偉人内村鑑三は、コスモポリタンたらんとする自分にとっては、とりたてて故郷がどこであるかということなど問題にならんという趣旨のことを書いている。
少年のころの私も、たまたま自分が生まれ育った土地風土や人間関係などにとらわれたくない、とある種の突っ張った気持ちで考えていた。
ある面では、この気分をその後もずっと私は引きずっていて、今に至っている。
その一方で、自分ほど故郷、特にその自然に愛着を持ち、その影響を受けたものは少ないのではないかともずっと思ってきた。
これはもう思想以前の問題で、自分の体に染み付いてしまっているものだ。」

と書いています。
赤城の山から吹き降ろす峻烈な空っ風にむかって歯を食いしばって歩いた少年仁三郎の故郷へのこだわりが、彼の人生最後の時間を『鳥たちの舞うとき』執筆に駆り立てたのかもしれません。

思想・文化も、哲学も歴史も経済も、自然風土抜きに語ることはできません。
貪欲に、もっと多くのエネルギーを、もっと多くの水を、と大消費地のニーズを口実にする手法は、原子力開発もダム開発も驚くほど似通っています。人類の過度のエネルギー消費は自然破壊をもたらし、温暖化どころか熱帯化を、地球全体の気候変化さえひきおこすに至っています。

八ッ場ダムの工事は進行中と聞きますが、こんな無駄なダム開発を許していいのか、私たちの力量が後世に問われる天下分け目のたたかいです。八ッ場ダムにNOの声をもっともっと大きく広げていきましょう。お集まりの皆様へ連帯の気持ちをこめて。

註：市民科学者、高木仁三郎さんのパートナーであった高木久仁子さんは、現在、NPO法人高木仁三郎市民科学基金の事務局長としてご活躍です。
イベント前日の１０月８日は、奇しくも高木仁三郎さんの七回忌でした。

富山和子さん（イベント呼びかけ人）より

どうか目を向けてほしいと、繰り返し繰り返し訴えてきましたが、ようやく今、このようにして東京から、心ある人たちが立ち上がって下さったこと、とても感慨深く、心強い思いがいたします。

実は『水と緑と土』発表以前の昭和４０年代半ば頃から、すでに林野庁内では、立場上ダム批判までは打ち出せないものの、下流消費地の皆さんが水源地へ目を向けて下さるよう検討会が設けられていました。私も黒澤丈夫上野村（うえのむら）村長などとご一緒に委員として会議に参加してきたのを思い出します。が、利根川流域各県が参加しても東京都だけは決して出てこず、結局、会は立ち消えに終わったのでした。

それほど古くからの課題であっただけに、私も、「東京都知事は一度でも都民に説明したことがあるか」と近著でも書き、いつまでもしつこい人だと、一部の読者からお叱りをいただいていたのでした。

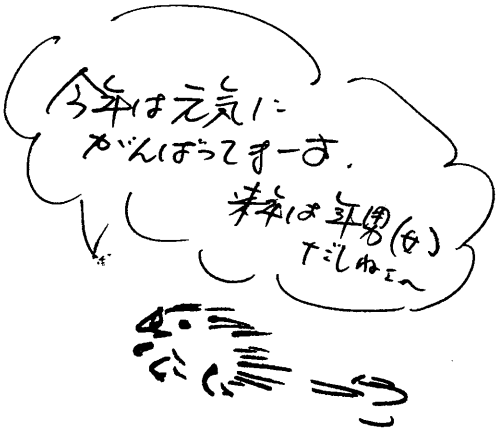
「水は土壌の産物であり、その土壌は日本列島にあっては、人間の労働の産物である。」これが私の終始掲げてきた持論です。

さる５月３日の憲法記念集会（日比谷公会堂）でも、今年のスピーチは日本代表としては私がお手伝いをしましたので、（あと一人は韓国代表、スピーチは毎年三人プラス志位共産、福島社民党首の計４名です）簡単ながらこの問題にも触れました。国土に目を向ければ、平和憲法も水の問題も、互いに重なり合う問題だと思っています。

当日は参加できませんが、会のご成功を祈ります。

註：環境問題評論家の富山和子さんも、高木仁三郎さんと同じく群馬県前橋市のご出身です。富山さんの“日本の米カレンダー”は、制作１８年目となりました。

（山の田んぼは、
いのししで大被害!!
収量激減でした。）
今



東京の水あまり

只野 靖（弁護士）

八ッ場ダム建設反対裁判の争点は、①利水上の必要性がないこと、②治水上の必要性もないこと、③環境破壊であること、④ダム地盤の危険性・貯水池地すべりの危険性があることの大きく４つに分けられる。本稿は、最大の争点である利水上の必要性がないことについて、筆者が東京都等を相手方とする裁判を担当している関係から、特に東京都の事情に絞って述べるものである。

1　ダム建設反対を巡るこれまでの裁判例

ダム建設を巡っては、これまで多数の裁判があったが、最終的に裁判において勝訴した事例は、筆者が知る限り、川辺川利水裁判、永源寺第二ダム裁判、二風谷ダム裁判の３例しかない（ただし、二風谷ダム裁判は、既にダムが完成していることから、結論としては収用裁決を取り消すことは公共の福祉に適合しないとする事情判決であった）。これらは、それぞれ、土地改良事業変更計画に対する異議申し立て棄却決定の取消、土地改良事業計画決定等の取消、土地収用法に基づく収用裁決の取消を求める裁判である

これに対して、八ッ場ダム裁判は、不要なダムに対する公金支出の違法性を争う住民訴訟であり、これら３つの裁判とは裁判形式を全く異にしている。住民訴訟の形式でダム裁判に勝訴した事例は未だ一例もないが、数ある敗訴判決の中には注目すべき指摘を行っている例もある。

その中でも、相模大堰事件（横浜地裁平成１３年２月２８日判決）が最も参考になる。

判決は、相模大堰を建設する利水上の必要性について、次のように述べている。

「県の一般会計から県企業庁の水道事業特別会計に支出される本件支出が、財務会計上の行為であることは疑いようがなく、かつ、本件支出について必要最小性に関する要請（地方財政法４条１項の「地方公共団体の経費は、その目的を達成するための必要且つ最少の限度をこえて、これを支出してはならない」との要請）に一定の裁量が認められるとしても、その裁量を越えた不必要な公金の支出は、財務会計法規上許されないというべきである。したがって、本件支出の必要性の有無の判断はこのような意味では避けることはできない。」

「昭和６２年ごろからの水需要の実績値については、増加傾向が減少し、横ばいともいえる傾向が見てとれるばかりか、前年度より減少した年度も見られる。このように実績値と予測値が一見して相当に乖離してきたのであるから、一部事務組合としての企業団としては、法令に従い予測値の過程を再検討すべきことが要請されたというべきである。」

ただし「水需要予測という確定値が定まらない事項を対象とする判断であること、水需要に変化が生じてきたといっても上昇の傾向が弱まったという程度であり、これに対応する必要性が消失したということではないこと」等から、「裁量権濫用の違法の非難は免れるというべきである」

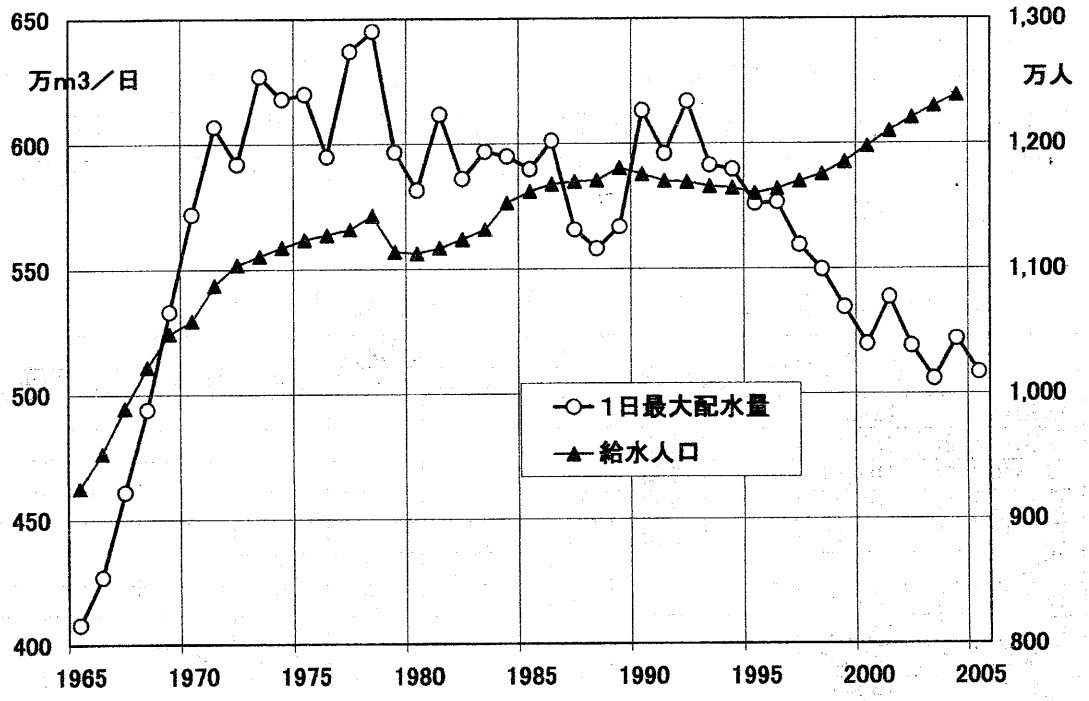
従って、この判例を前提とすると、「長期的な需要予測等に基づいて計画的に行う公共事業について、適切な分析に基づいて計画を策定しなかった場合、あるいは計画実施後検証を繰り返して適切に事業計画の見直しをせず、漫然と当初計画どおりに事業を進めてきた場合には、事業支出が違法とされる可能性が高いこと」になる。（伴義聖ほか「水道行政は水物？」判例自治２５９号１１頁。なお、伴義聖氏は、相模大堰事件の神奈川県等の代理人であり、八ッ場ダム裁判でも、群馬県、茨城県及び千葉県の３つの裁判で県側の代理人となっている。）

2　八ッ場ダムの利水上の必要性について

それでは、八ッ場ダムについてはどうか。

図表１は、東京都における過去 40 年間の１日最大配水量の実績と人口数をグラフ化したものである。配水量のデータは、1972 年までは日本水道協会「水道統計」により、73 年以降は都水道局「事業概要」に従った。東京都における１日最大配水量の実績は、1978 年の日量 645 万m3 をピークとして、基調として緩やかな減少傾向にあり、特に 92 年以降の減少は顕著である。東京都では過去 27 年間において、１日最大配水量が 137 万m3（ピーク時の２割以上）も減少している。

【図表１】東京都における過去 40 年間（1965 年～2005 年）の１日最大配水量の推移



特筆すべきは、近年給水人口が増加しているにもかかわらず、１日最大配水量は減少していることである。これは、一人あたりの水使用量の減少量が、人口の増加による水需要の増加量を完全に上回っていることを意味している。

一方、東京都が現に保有する水源は、東京都が認めるものに限っても日量 623 万m3 に上っている。１日最大配水量と比較すると、ここ３年間で最も大きい 2004 年でも 522 万m3 であるから、東京都の主張する保有水源 623 万m3 を約 100 万m3 も下回っている。年間でたった１日の最大時に、このような大量の水源が余っているのである。

なお、東京都が認める 623 万m3 には、現に利用している地下水が入っていない。東京都が実際に保有している水源は、東京都が認めている 623 万m3 よりもはるかに大きく 700 万m3 に達しており、その前提に立てば余剰水源はさらに著しく大きくなる。

結論的に言えば、「水需要予測」は確かに「確定値が定まらない事項を対象とする判断で」はあるが、東京都においては「水需要」の「上昇の傾向が弱まったという程度」にとどまらず、すでに一見して明らかに長期的減少傾向を示しており、新たな水源整備を行う「必要性」は全く「消失し」てしまっているのである。

3　東京都の主張のまやかし

すでに水余りの状況にあるという住民側の主張に対して、東京都は何ら正面から返答していない。東京都が八ッ場ダムの利水上の必要性に関して述べているところは、水需要が今後は増加するという点と、１／１０渇水年に対応する必要があることの２点である。

(1)　東京都は、水需要を予測するにあたって、「都は他の都市に比べて人口や社会経済規模が大きく、都の水道需要はこれらの影響を受けやすいことから、単に水道需要実績の傾向のみを捉えて推計を行うのは妥当ではなく、人口や社会経済動向の変化と水道需要との関連性について分析し、分析結果を基に推計を行うべきと判断し、重回帰分析手法を採用している」として、あたかも、これが唯一無二の信頼できる予測であるかのごとく述べる。しかしながら、重回帰分析手法などを用いたという東京都の過去における予測は、ことごとく過大であった。これが現実である。

図表２は、東京都における過去の水需要予測であり、これをグラフ化したものが図表３（右頁）である。これをみれば、いかに東京都が過去行ってきた水需要予測が過大であったか、一目瞭然であろう。東京都は、常に水需要予測を過大に見積もり、ダム建設への参加を正当化してきたのである。

【図表２】東京都の水需要予測の改定経過（１日最大配水量　万m3／日）

			基準年度	目標年度								
				1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2013年
計画策定年度	1970年	A	1969年	698	834	931						
	1974年	B	1973年		832							
	1975年	C	1974年		778							
	1976年	D	1975年		725	810						
	1978年	E	1977年		688	762	820					
	1980年	F	1979年			693	748	797	847			
	1982年	G	1980年			647	689	720	740			
	1986年	H	1985年				640	670				
	1990年	I	1989年					650	670	680	690	
	1998年	J	1995年						620	630		
	2003年	K	2000年									600
実績値				582	561	590	613	576	520	508		

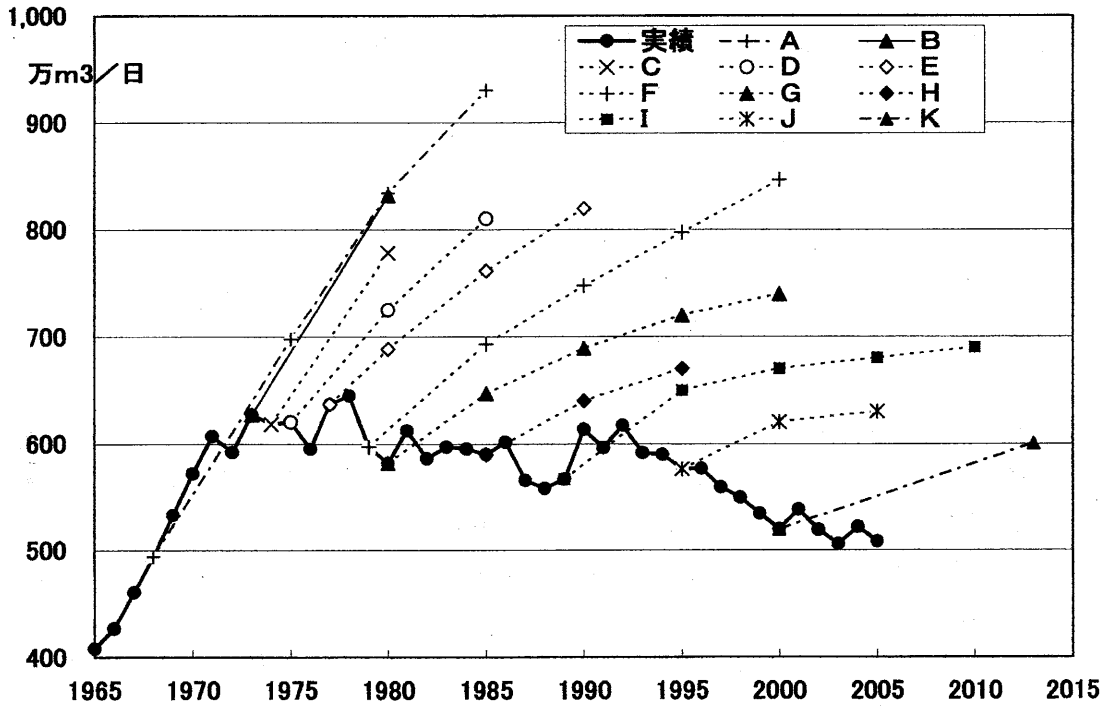
（出典　「東京都水道局の事業概要」昭和 45 年度～平成 17 年度）

このような東京都の予測の誤りは、東京都が採用しているという重回帰分析手法による計算結果が、全く信頼に足るものではないことに起因する。回帰分析とは、たとえて言えば、喫茶店において、毎日の気温とアイスコーヒーの注文数とが何らかの関連性があることを前提として（気温が高ければ注文が多い、気温が低ければ注文は少ないという傾向があることを前提として）、気温と注文数との間の関係を関数で求め予測を行うといった方法である。

ところが、東京都が、生活用水の予測のために用いた説明変数（社会経済指標）は、「個人所得」と「平均世帯人員」のわずかに２つだけであった。しかし、現在我が国で、「所得が増加すると水使用量が増加する」という主張が、どれだけ説得力を有するであろうか。むしろ、個人所得の伸びは、節水型洗濯機、自動食器洗浄機（節水効果は手洗いよりも高い）等に代表される節水機器の導入の要因となっているのではないだろうか。また、多人数世帯の１人１日当たり使用水量は、

少人数世帯のそれよりも少ないように思われがちであるが、一人世帯よりも二人世帯の方が、１人１日当たり使用水量が多いという統計もある。いかに優れた手法であっても、その手法を使用する者が適切な項目を選定しなければ意味がない。重回帰分析を用いた水需要予測が、大はずれを繰り返してきたことが、何よりの証拠である。

【図表３】東京都の過去の水需要予測（表―左頁）と実績値（１日最大配水量　万m3／日）



(2) そこで、東京都が展開してきたのが１／１０渇水年への対応が必要との議論である。東京都は、5年に1回程度発生する規模の渇水時には、近年の小雨傾向により河川流況が減少傾向にあることから、河川から取水できる水量は当初計画した水量に比べておおよそ２割減少するという。しかしながら、この主張は、いかにも苦しまぎれというべきであろう。

4　まとめ

以上のとおり、八ッ場ダム建設の利水上の必要性については、水需要の論点では被告の主張が全くの誤りであることを論証し、渇水対策ということを持ち出さざるを得ないところまで被告を追い詰めている。今後は、渇水対策目的が、地方財政法４条１項「地方公共団体の経費は、その目的を達成するための必要且つ最少の限度をこえて、これを支出してはならない」に関して、裁量の範囲内と言えるのか（裁量を越えた不必要な支出ではないか）という点が、最大の争点になると思われる。

＊ 本文の図表は、嶋津暉之氏、梶原健嗣氏の協力を得て、八ッ場ダムをストップさせる東京の会で作成した。

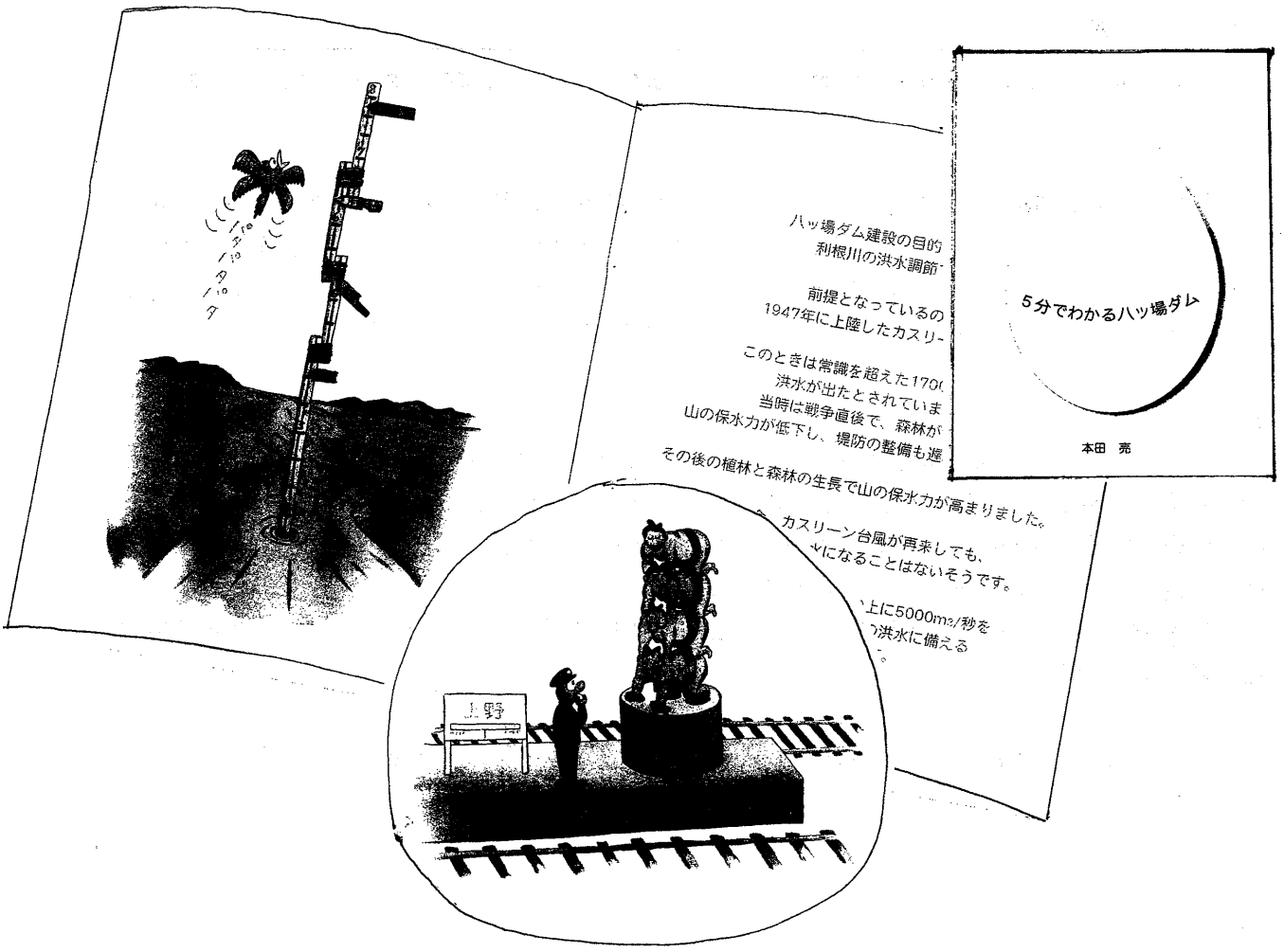
◆ 環境マンガ『5分でわかる八ッ場ダム』ーヤンバ！ ヤメンバ！ー

“八ッ場いのちの輝き”呼びかけ人の本田亮さん（東京在住）が制作して下さいました。

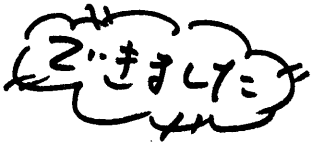
本田さんは♪ ピッカピッカの一年生…♪ など数々のヒットを飛ばしてきた電通のCMプランナー。1980年代、趣味のアウトドアスポーツが高じ、同僚らと“日本で一番過激でヘタなカヌーチーム―サラリーマン転覆隊”を結成。90年、環境問題に目覚めてイラストを描き始め、試行錯誤してたどりついたのが、今、旬の環境マンガ『エコノザウルス』です。

CMプランナーとして、写真家として、環境マンガ家として大活躍の本田さんが、超多忙生活の合間にボランティアで手がけた本書は、掌サイズの小冊子に楽しいマンガが満載です。どうぞご活用下さい。

会員価格：100円（送料別）
監修：大熊 孝、　嶋津暉之　　編集：八ッ場ダムを考える会
デザイン装丁：KURUMI HONDA　　発行：同文社
問い合わせ先：[redacted]（東京・田中）、[redacted]（千葉・入江）



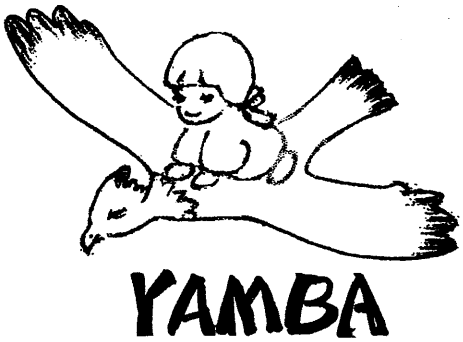
事務局ニュース



◆パタゴニアの　八ッ場運動支援Tシャツ

“八ッ場いのちの輝き”支援にと、パタゴニア日本支社よりオーガニックコットン100%Tシャツ200枚を提供していただきました。
左胸元に、会報の表紙でおなじみのデザイン（下図）がプリントされ、左前すそにはパタゴニアのロゴマークが入っています。

価格：3000円（送料込み）。
色・サイズ：　白（女性S）、　黒（男性S，女性M）、
　　キナリ（男性M・L，女性L，LL）
問い合わせ先：[redacted]（事務局）。
＊5枚以上ご希望の団体には卸売価格で提供します。



（キャラクターの紹介です）
わたしの名前はショウ
吾妻渓谷にずーっと昔から生えている
ミズナラの木の精です
そして　これはイヌワシのクー
そばの崖の上に　いく代もいく代も前から
巣を作っています
（会報1号表紙より）

◆ メーリングリストを開設しました

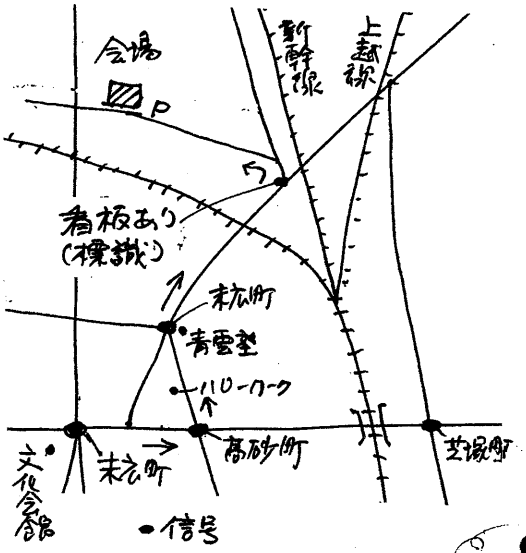
ホームページにこのほどメーリングリストのページを加えました。どなたでも入れるオープン形式です。マスコミだけではわからない生情報、双方向の意見がドシドシ投稿されるような、そんな活気あるメーリングリストが運動の輪を広げることを願っています。

メーリングリストの登録をするには、八ッ場ダムを考える会のホームページを開いて、トップページの一番下にある「八ッ場メーリングリスト」の右端の赤い矢印をクリックしてください。
アドレスは→http://www.yamba-net.org/modules/ml/
＊自動登録を希望する場合は、事務局メール（info@yamba-net.org）へご連絡を！

八ッ場ダムを考える会総会のご案内

第七回総会を下記のように開催いたしますのでどうぞご出席ください

日時：11月26日午後1：30～
会場：高崎市総合福祉センター
高崎市末広町115－1
TEL 027－370－8822



〈 高崎駅からの行き方 〉
西口バス停より『ぐるりん』
（高経大線六郷先回り）
12：55　発―13：07　開場敷地内着
13：40　〃―13：52　　〃

八ッ場ダムは現在の計画では、２０１０年度完成の予定です。
けれども、本体工事はまだまだ先です。
次の世代の“いのち”のために、ダム計画を見直しましょう。

年会費（秋の総会から総会まで）／個人２０００円（学生１０００円）、団体３０００円
郵便振替口座００５５０－２－３２６８１

編集：八ッ場ダムを考える会

[redacted]

【URL】http:/www.yamba-net.org　【E-mail】info@yamba-net.org